

# 濟州の通婚圏に関する再検討

—安徳面徳修里の事例を中心に—

津波 高志  
(琉球大學 教授)

## 目 次

- |            |               |
|------------|---------------|
| 1. はじめに    | 4. 村人の説明      |
| 2. 徳修里の概況  | 5. 村落内婚と近隣村落婚 |
| 3. 徳修里の通婚圏 | 6. まとめ        |

### 1. はじめに

韓国最南端に位置する濟州道<sup>1)</sup>では、1993年から97年まで毎年1巻ずつ濟州文化資料叢書「濟州の民俗」を刊行した。その目的が自らの伝統文化を再発見し、その全体性を定立して、新たな高価値の文化を創出することにある<sup>2)</sup>とするだけあって、濟州の民俗文化のほぼ全分野にわたって研究史に配慮した整理がなされている。濟州民俗文化の全体像を把握するうえできわめて貴重な叢書であり、目下それ以上の『濟州民俗文化事典』は無いとすら言える。

その叢書のなかでも、私が私自身の専門分野との関係で最も興味深く読んだのは、第5巻「濟州の民俗 V 民間信仰・社会構造」の「社会構造篇」である。その「第二章 家族と親族」は李昌基嶺南大学教授によってまとめられている。第1節では濟州の家族と親族に関する従来の研究の流れを概観し、第2節から第6節まで五つの節にわたって、これまで取り上げられてきた主要な論点を執筆者自身の視点から一つ一つ丁寧に整理している。傾聴すべき見解が多々盛り込まれており、その分野に関する最新で、最も行き届いた総括となっている。

ただし、私はそこで展開されている執筆者のすべての見解に対して賛意を表すわけではない。幾つかの点に関してはどうしても賛同しかねるのである。ここではその一つ、濟州の通婚圏に関して、私が今回の現地調査で入手した安徳面徳修里<sup>3)</sup>の事例に主に拠りながら検討してみたい。

まず、濟州の通婚圏に関する従来の研究を李昌基がどのように捉えているのか確認しよう。李によれば、「これまで、濟州道の地域的通婚圏を論議する際に、濟州道の婚姻の特徴を村落内婚と見るべきか、それとも近隣村落まで包含する近処婚(近隣村落婚)または面内婚と見るべきかという議論があった。しかし、筆者はこのような論議が濟州道の婚姻の特徴を理解するのに、なんら助けになるとは思っていない」というのである(李昌基 1997:559)。

引用文献を明示してはいないが、1990年の時点で濟州の通婚圏に関する研究を振り返り、上記のような検討を行ったのは、実はこの私自身である。私は南濟州郡城山邑水山2里の事例に基づいて、「兩班の通婚圏の範囲は広く、常民のそれは狭いとするような階級差による通婚圏の範囲の違いは、濟州島では認められない。韓国全域に共通する禁止的婚姻規定としての氏族外婚制と優先的規定としての階級内婚制によりながら、兩班意識を持つ者、持たぬ者いずれも近処婚を行っている」としたのであった(津波 1990:84-85)。それに対して、李昌基は「濟州道の婚姻の特徴を理解するのに、なんら助けになるとは思っていない」としているのである。

そして、その根拠として次のように自説を展開している。「村落内婚を慣習や法律が強制しない限り、そして村と外部社会との社会関係が徹底的に遮断された孤立社会でない限り、すべての人々が村内で結婚するという事は不可能なことである。濟州道のように、慣習や法律が村落内婚を強制することもなく、また婚姻可能な村々が近隣に広く分布している状況で調査されたすべての村が、少なくとも30%内外(またはそれ以上)の村落内婚率を示しているとするれば、そうならざるをえない特殊な事情が存在しない限り、この数値は非常に高い比率であることに相違なく、したがって村落内婚を濟州島の婚姻の重要な特徴と規定するのは

全然無理のないことと言えよう。近隣村と結婚する比率が高いのは村落内婚の延長と解釈せねばならないと思われる」(李昌基 1997:559)。

このように李昌基によれば、村落内婚の比率の高さこそ濟州島の婚姻の一大特徴なのであり、近隣村落との婚姻の比率の高さも村落内婚の延長になってしまうのである。また、「人為的で行政的な区画を基準にして面内婚とか、郡内婚とか、あるいは道内婚とかいう論議は、意味ある社会関係の範囲を把握しようとする論議ではまったく無意味であるとしか言いようがない」のである(李昌基 1997:559)。

私は少なくとも面内婚以下に関してはほぼ同意見である。しかし、村落内婚の比率の高さのみを濟州の婚姻の特徴として一方的に強調して良いものであろうか。また、近隣村と結婚する比率が高いのは村落内婚の延長と解釈できるのであろうか。これら2点に関しては、まだまだ検討の余地があると考ええる。主に徳修里の資料によりながら、これら2点に絞って再検討を試みたい。

なお、本論で用いる通婚圏とは、ある村落の成員たちが村落の内あるいは外の者たちと結ぶ通婚関係の地域的広がりのことであり、それはある時間内における通婚関係を地域ごとに区切った度数の百分比で表される(小山 1954:397、白井 1971:458)。通婚圏といえば、今日の日本では重要な研究課題にはほとんどならないが、次のようにかつて小山が指摘した諸点は、現時点における濟州の文化・社会の研究にとって、決して重要性を失っていないと思われる。

すなわち、通婚圏は「婚姻関係の範囲と集中度を示すところの指標であり、またその背後にある各種の社会を示唆するところの指標であり、社会関係を客観的に測定しようとする場合の一つの有力な手がかりである」(小山 1954:395)。そして、「通婚圏が社会関係の研究の上で尊重される重要な根拠は、それが時代の変化を量的に示す一つの客観的指標となり得ることである」(小山 1954:399)。換言すれば、濟州において濃密な社会関係が如何なる地域的広がりの中かで織りなされ、かつそれが如何に変化しているかを知るための有力な指標が通婚圏なのである。

## 2. 徳修里の概況

徳修里は済州道南済州郡安德面に属する行政の末端単位である。日本式に言えば、安德村字徳修ということになるであろう。済州島全体からすれば、西南の端っこに位置している(地図1参照)。徳修里のすぐ南には観光地で有名な山房窟寺のある山房山がそびえている。

徳修里の公式的な統計によれば、1997年12月末日現在で戸数305戸、人口1,112名(男553名、女559名)である(徳修里民俗保存会 1998:4)。ただし、それはあくまでも書類上のことであり、後に見るように、実際に徳修里に居住している住民の世帯数や人口はもっと少ない。

住民はすべて農業で生計を立てている。耕地面積は畑338ヘクタール、果樹園389ヘクタールで、一戸あたりの平均耕地面積は、済州島の平均の約2倍ほどになるとのことである。換金作物として最も重要なものは蜜柑と胡麻である。

ただし、それは1970年代以降のことで、それ以前は農業を主としながら、ほとんどの者が兼業として牧畜も行った。今では20戸ほどが牧畜を営んでいるにすぎない。その当時の作物は麦、粟、豆、芋、胡麻などであった。1948年に勃発した4・3事件以前は鍛冶業を営む村として有名であった。

口伝によれば、およそ400年前に村が出来たと言うが、その創設に関する確実なことは分からない。ただ、史料によれば、1831年自丹里から分里して新堂里が成立し、それが1840年さらに徳修里に改名して現在に至っている(高昌錫 1993:7)。

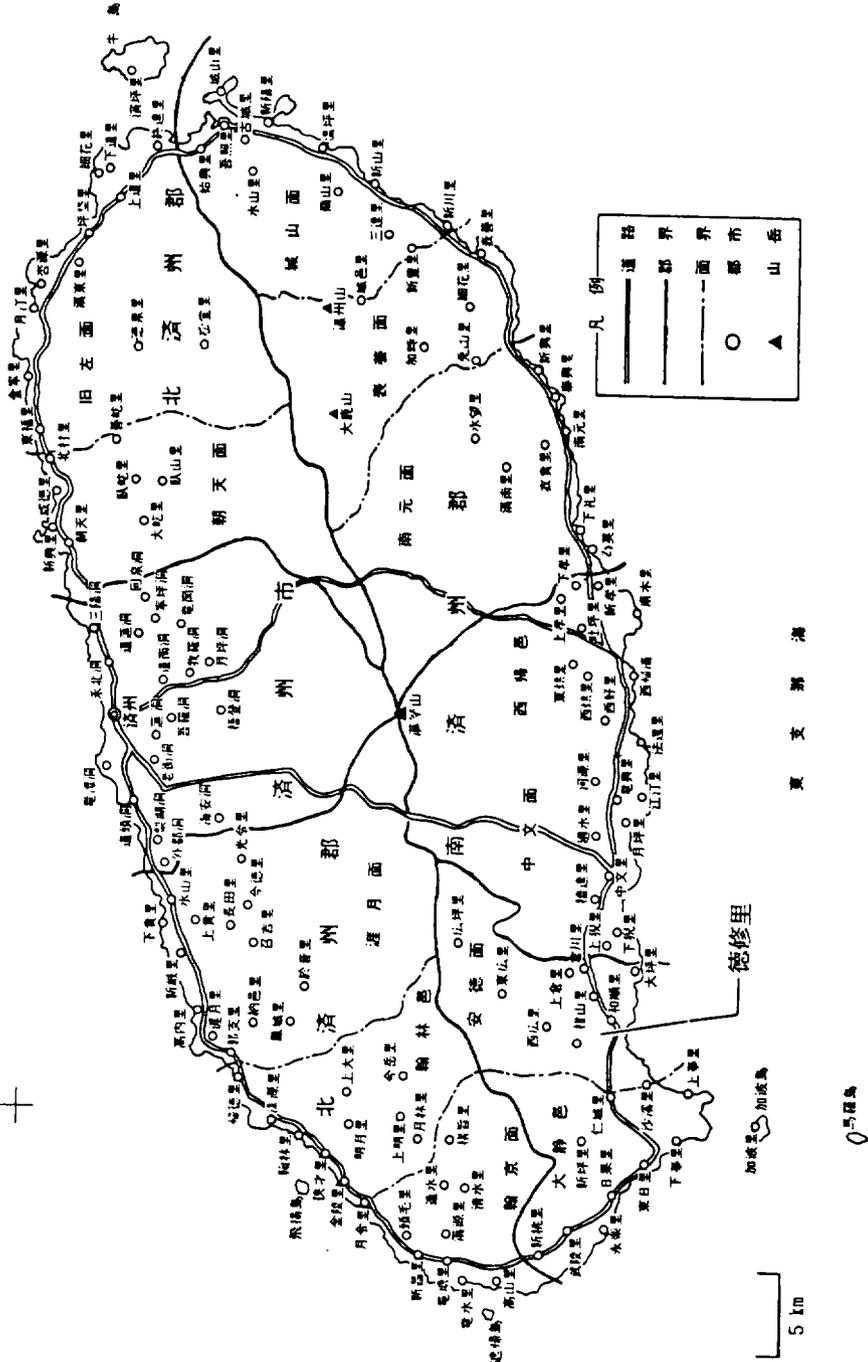
徳修里は三つの自然集落からなっている(図1参照<sup>5)</sup>)。土地の人々は「上部落」、「東部落」、「西部落」と呼んで区別している。上部落が最も規模が小さくて、約20戸程度であり、残りは東部落が3分の1、西部落が3分の2を占めるとされる。

姓氏別に見ると、礪山宋氏が最も多く、次に金海金氏、慶州金氏と続く。これら3氏で徳修里のおよそ6割ほどになるとのことである。礪山宋氏と慶州金氏は西部落に多く居住し、反対に金海金氏は東部落に多いとされる。

濟州の通婚圏に関する再検討

地図1. 濟州島

4



徳修里でかつて鍛冶屋を始めたのは宋氏家門の者とされている。すなわち、今から250年ほど前に宋世万によってその技術は伝えられたとされる。鍛冶業それ自体は今日では完全に姿を消しており、一年に一度開かれる伝統民俗再現大会でしか往年の面影をしのぶことが出来なくなっている。が、鍛冶屋にまつわる独特の民間信仰に関しては今日でもまったく無視するというわけにはゆかない。表面上は分からないが、潜在的には現在でも配偶者の選択に多少は影響を与えているようなのである。その点については徳修里の通婚圏に直接関連することなので、ここで触れておくことにしたい。

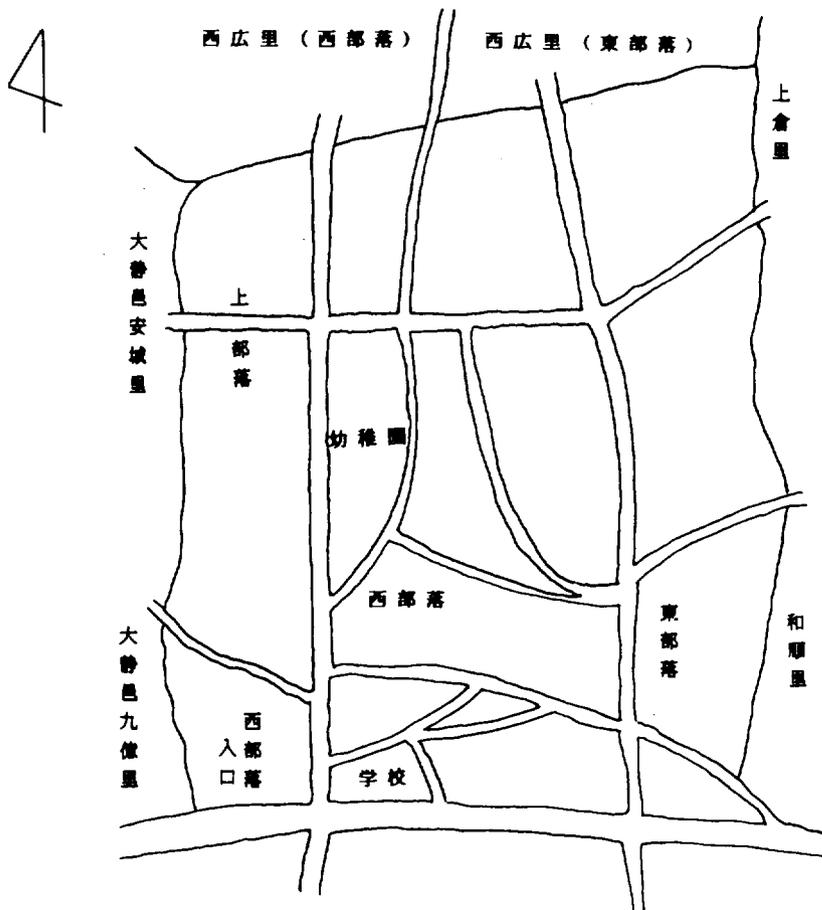


図1 徳修里略図

## 濟州の通婚圏に関する再検討

徳修里の各家庭では50年ほど前まで、トウイタルバンと称する神を祀っていた。トウイタルバンとは字義どおり解せば、「後ろのお爺さん」の意であり、母屋の後ろに祀られた。やや説明的なニューアンスでヨンガムシン(令監神)とも言う。50年ほど前に祀らなくなったとはいうものの、それに対する儀礼や信仰については今でもかなり鮮明に記憶されている。

母屋の後ろにチャントクデと称する味噌、醤油、キムチなどを入れた甕を置く場所がある。その近くの石垣の角にシルと呼ばれる甕をひっくり返して置き、その上に平たい石をのせていた。それをトウイタルバンと呼んだのである。

忌祭祀や名節祭祀など、家で祭りがあるたびに、主婦が供物を少しずつ、甕の穴に入れた。つまり、トウイタルバンに供えた。もちろん、その際には蓋石を外すのである。それらの祭祀以外にも、一年一度は秋に午の日を選び、夜10時頃、主婦がきび団子を供えた。トウイタルバンの好物だからである。

トウイタルバンは男性(お爺さん)であり、それを祀るのは女性(主婦)である。トウイタルバンは男性であるために、女性について行くと言われる。女性が嫁ぐ際にその嫁ぎ先に一緒について行くのである。ただし、嫁ぎ先でトウイタルバンがすでに祀られている場合には、新たにそれを祀る場所を設置することはない。すでに祀られているものを祀るのである。トウイタルバンはそれを祀る女性と性関係をもつこともあると信じられていた。

トウイタルバンはもともと鍛冶屋の神様であったと言われている。徳修里は4・3事件以前までは濟州島唯一の鍛冶屋の村として有名であった。徳修里にその技術を伝えたのが礪山宋氏の先祖であったため、村で最も戸数が多く、有力な一族である宋氏を中心にその技術は伝わってきた。4・3事件以前は、炊事用具や農具を濟州島の全域に供給し、経済的にも大変潤っていたのである。

鍛冶屋を営む宋氏の家から他家に嫁ぐ際に、その女性にトウイタルバンもついていく。たとえ、嫁ぎ先が鍛冶業を営まなくても、農業を見守

り、豊饒を招く神として祀られた。つまり、もともとは鍛冶屋の守り神であったものが、婚姻関係を通してしだいに農業の守り神にもなっていくと言われるのである。鍛冶業であれ、農業であれ、それを祀ると富者になると信じられていたのである。

### 3. 徳修里の通婚圏

徳修里における村落内での婚姻件数や近隣村落との婚姻件数などをまず数量化して見てみることにしたい。その際、単に現在の婚姻関係を地域的な広がりや数値化するだけでなく、世代による変化も捉えられるように留意したい。

徳修里の概況では、戸数305戸と紹介したが、実際に私が調査した限りでは272世帯しかない。つまり、役所の書類上の住民と、実際に住んでいる住民との間には数のうえでかなりの差があるのである。婚姻件数を調べる際の基本的な資料にもなるので、ここで言う世帯とは何かについてまず簡単に触れておきたい。

ここでの世帯とは土地でシッカー(食口)と称され、同居、同竈、同財をなす社会単位を指している。日常生活の基本的な単位なので、一般の村人はもちろんお互いのシッカーの成員についてよく知っている。加えて、年間2万5千ウォンの里税が徴収される単位でもあるので、里事務所でもそれをよく掌握している。ただし、里税に関しては生活保護所帯は免除されており、また老人夫婦の世帯については夫が75歳以上、女性の一人住まいは70歳以上が免税となっている。

さて、272世帯に居住する夫婦を対象にして、世帯主の妻を出身地ごとに分ける方式、換言すれば婚入のみを数える方式で通婚圏を描いてみたい(婚出については時間の制約上調査できなかった)。婚入に限定しても、一つの世帯が常に一組の夫婦のみによって構成されているとは限らないし、世帯主が未婚者であるなど、算定の基礎となる資料に若干の断りが必要である。世帯主の妻以外に母親、あるいは息子の妻が同居する世帯が10世帯ある。独身者が世帯主となっている世帯も12世帯ある。

また、今回の調査は本人から直接聞き取りを行ったわけではないの

濟州の通婚圏に関する再検討

表1 地域別世代別婚姻件数

地 域		現件数	旧世代	新世代	不明
安 徳 面	徳修	105	84	18	3
	沙溪	25	11	13	1
	和順	20	13	7	
	西広	14	9	5	
	柑山	10	6	4	
	上倉	4	1	3	
	東広 広坪	1 1	1 1		
大 静 邑	大静	23	11	12	
	慕瑟浦	2	2	0	
	加波	2	1	1	
	武陵	1	1		
	旧中文面	7	6	1	
そ の 他	西帰浦市	12	2	10	
	翰京面	1		1	
	翰林邑	4	2	2	
	涯月邑	1		1	
	濟州市	2		2	
	旧左邑	1			1
	南元邑	4	1	3	
	表善面	1	1		
	城山邑	1		1	
	楸子面	1	1		
	陸地	7	1	6	
計		250	155	90	5

で、妻の出身地を明らかに出来なかったものも12件ある。さらに、再婚、妻死亡、夫婦ともに他所の出身者、妻のみ徳修里の出身者といったケースもそれぞれ合わせて8件ある。それらはすべて計算から除いた。

そのような次第で、272世帯から250件の婚姻件数を得た。その地域ごとの内訳を示したのが表1の「現件数」の欄である。地域に関しては安徳面と大静面のみ村落ごととした。ただし、大静面の中で仁城、安城、保城の3村落はまとめて大静とした。これら3村は朝鮮時代末期まで一

つの村として大静城内にあったため、今日でもひとまとめにして大静と呼ばれているからである。また、上琴里と下琴里も一々区別せず、琴瑟浦と呼ばれているので、一つにまとめた。安德面と大静面以外は市、邑、面、陸地(本土)のように大まかに分けてみた(参考のため、西帰浦市から旧中文面だけは分けてみた)。

さらに、その「現件数」を世代によって分けたのが「旧世代」と「新世代」の欄である。大雑把な区切り方ではあるが、主人が50代以上のものと40代以下のものとの二区分してみた。つまり、主人が1947年以前の生まれを「旧世代」、48年以降の生まれを「新世代」とみなしたのである。主人死亡の場合は妻本人の年齢を基準にした。「不明」の欄は夫婦いずれの年齢も不明のものである。

表1は徳修里を例に取れば次のように読める。数量化の対象になった今日の250組の夫婦のうち、105組は徳修里の者同士つまり村落内の結婚であり、さらにそのうちの84組は旧世代、18組は新世代に分類できる。また、世代不明の夫婦が3組ある。

さて、表1の地域をさらに距離と婚姻件数との相関関係に着目して四つの地域に区分したい。自村落、近隣村落、近接地域、遠方地域である。表1の「現件数」、「旧世代」、「新世代」の各欄をこれら四つの地域ごとに分け、累積比まで加えて表示したのが、「表2. 徳修里通婚圏」、「表3. 徳修里旧世代通婚圏」、「表4. 徳修里新世代通婚圏」である。自村落すなわち徳修里以外については区分の仕方も明らかにしながら、地域ごとに数値を確認しよう。

自村落すなわち村落内での婚姻は、250件の現婚姻件数のうち105件を占め、比率にすれば42%になる。それをさらに旧世代と新世代に分けると、旧世代においては155件中84件すなわち54.2%が村落内婚であるが、新世代においては90件中18件、20%に減少する。すなわち、村落内婚率の高さは旧世代において特にはっきりしているのである。

近隣村落とは、距離的に数知以内の範囲に位置する諸村落である。安德面沙溪、和順、西広、柑山、大静邑大静などで、これらはすべて婚姻件数が10件以上の村ばかりである。それらの婚姻総件数250件に占める件数と比率は、92件36.8%である。

濟州の通婚圏に関する再検討

表2. 徳修里通婚圏

地 域	自村落	近隣村落	近接地域	遠方地域	計
事例数	105	92	18	35	250
百分比	42	36.8	7.2	14	100
累積比	42	78.8	86	100	・

表3. 徳修里旧世代通婚圏

地 域	自村落	近隣村落	近接地域	遠方地域	計
事例数	84	50	13	8	155
百分比	54.2	32.3	8.4	5.2	100.1
累積比	54.2	86.5	94.9	100.1	・

表4. 徳修里新世代通婚圏

地 域	自村落	近隣村落	近接地域	遠方地域	計
事例数	18	41	5	26	90
百分比	20	45.6	5.6	28.9	100.1
累積比	20	65.6	71.2	100.1	・

これら近隣村落との婚姻件数および比率を旧世代と新世代に分けると意外な事実が浮かび上がってくる。旧世代においては155件中50件32.3%であり、新世代においては90件中41件約45.6%となる。つまり、それらの近隣村落との婚姻関係は村落内婚のように新世代において減少しているわけではないのである。

近接地域とは、上記の近隣村落よりは距離的に遠方にあるが、徳修里と同じ安徳面か、さもなければ東西に直接隣接する大静邑か旧中文面の諸村落である。旧中文面に関しては村落ごとの件数を明らかにすることは出来なかったが、いずれにしてもこれらの地域の諸村落の場合、婚姻件数は数件以内という程度である。

近接地域の婚姻件数と比率は、現件数250件中18件7.2%で、旧世代では155件中13件8.4%であり、新世代では90件中5件5.6%である。これらの数値だけを見ると、一見さしたる意味があるようには思えないが、し

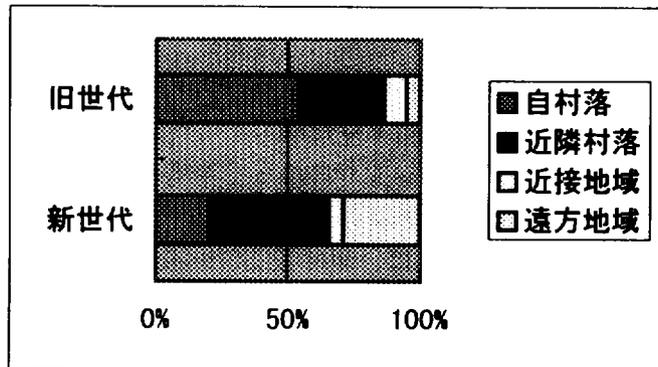
かし、次の遠方地域と比較すると、それなりに意味をもっている。

遠方地域とは、近接地域より遠方の諸地域である。表1では「その他」と一括した諸地域である。済州道内の諸地域はもちろん、陸地（本土）までも含んでいる。その現件数に占める比率は250件中35件14%で、そのうち旧世代は155件中8件5.2%であり、新世代は90件中26件28.9%である。村落内婚とはまったく逆に、遠方地域との婚姻は明らかに新しい世代で急増しているのである。旧世代では近接地域よりも婚姻件数が少ないにもかかわらず、新世代においては逆転し、はっきりとその重要性が高まっているのである。

世代に配慮しながら、徳修里の地域的通婚圏を整理すると、以下のようになる。旧世代では村落内から近隣村落、近接地域、遠方地域へと同心円的に距離が遠くなるにつれて、54.2%、32.3%、8.4%、5.2%と比率が低下していく。しかし、新世代では村落内20%、近隣村落45.5%、近接地域5.6%、遠方地域28.9%となり、同心円的構図に変化が起きている。明らかに村落内婚の比重が低下し、遠方地域との婚姻が重みを増しつつあるのである。参考までに、二つの世代の通婚圏をグラフで示しておきたい(グラフ1. 旧新世代の通婚圏)。

ただし、同心円的構図の変化は単純に村落内婚が減少した分だけ、遠方地域との婚姻が増加したことを意味するのではない。近隣村落との婚姻も増加している。つまり、通婚圏の広域化は村落内婚の比率の低下を

グラフ1. 新旧世代の通婚圏



生み出すとともに、近隣村落との婚姻関係を巻き込んだ方向へと動いているのである。

#### 4. 村人の説明

ここで提示される資料は主に、徳修里老人会の二人の役員(60代と70代各一人)からの聞き取りをまとめたものである。ただ、聞き取りそのものは念のため他の数人の老人たちにも行い、また、若い世代の代表者として里事務所の役員(40代)の話も聞いた<sup>6)</sup>。私の理解では老人会の二人の役員の説明は大筋で徳修里の老人たちの世代を代表する見方と思われる。以下、「我々」というのは直接的にはその二人の役員のことであるが、大まかに捉えると、だいたい徳修里の60代から70代の老人たちと見なしてもよいであろう。

我々の若い頃はほとんど皆が仲媒結婚を行った。お互いに結婚の日まで顔さえ知らないこともあった。今でも仲媒結婚はあるが、ほとんどが恋愛結婚になりつつある。若い人たちは村を出て、「陸地」や「済州市」などで生活するようになったので、あちこちの人と知り合うようになり、外部の者との結婚が増えていることは確かである。しかし、それはそう古いことではなく、20年ほど前、せいぜい遡っても30年ほど前からの傾向である。

我々の若い頃はほとんど同じ「部落内」で結婚した。60%から70%はそうだろう。ただし、部落内の者と是非結婚すべきであるとか、部落内の者と結婚した方が望ましいとか、他所の村の者と結婚してはいけないとか、ということではなかった。昔は生活の場がほとんど部落内だったので、他所の人と知り合う機会はなかったし、お互いに部落の事情、家庭の事情をよく知っている者同士で、経済的なつり合いなどにも考慮して相手を選んだので、自ずから部落内での結婚が多くなったのである。

徳修里は三つの集落からなっている。部落内結婚と言う際の部落とは、徳修里の三つの集落、すなわち東部落、西部落、上部落を含んでい

る。決して徳修里内の一つの部落と言うことではない。

部落外との結婚関係も昔から結構ある。特に、近隣の村すなわち和順、沙溪、柑山、大静などとの結婚が多い。現在も昔も多い。和順と沙溪は海村である。徳修里はもともと海の仕事をしないので、徳修里に嫁に来ると、海女の組合では徳修里の人間として扱い、海女漁業の権利を失ったものとする。徳修里から沙溪や花順に嫁いても、幼い頃から潜りの訓練がなされていないので、海女の仕事は出来ない。しかし、権利としては出来る。

徳修里から南西方向に位置する仁城、安城および保城の三つ村との結婚は、風水との関係であまり歓迎されない。よくは知らないが、気が行きっぱなしで、戻ってこないとのことである。昔からその人と結婚すると失敗すると言われている。単なるいわれではなく、事実としてなぜか離婚率が高い。実際そういうことが現在でもある。我々はその三つの村をひとまとめにして大静村(Tejongkol)と呼んでいる。朝鮮時代の末期までその三つの村は一つの村として大静城内にあったので、今日でもそう呼ばれているのである。

徳修里はもともと両班の多い中山間部落であるが、海村との結婚を嫌ったり、忌避することはなかった。反対に、徳修里に対して周辺村々ではトッチェビ・マウル(tocchebi·maul:妖怪村)と噂して、婚姻関係を避ける傾向があった。現在でもその影響はないとは言えない。徳修里は昔は鍛冶屋で栄えた村である。夜、空に舞う鞆の火花を見て、周辺村の者たちはトッチェビだと囁きあった。夜、あちこちでびかびか光る妖怪火(heoppul)がトッチェビなので、それと誤解したのであろう。

トッチェビを徳修里の人々が祀っていると周辺村の人々が噂する理由は、単に鍛冶屋の火だけではない。徳修里の人々が屋敷内に祀るトウイタルバン(twitharubang)信仰も深く関係している。

徳修里の人々は鍛冶屋や農家を富者にする守り神としてトウイタルバンを祀ったのであるが、他所の村の人々は、そのようには理解しなかった。夜空に舞う鞆の火花がトッチェビであれば、トウイタルバンはまさに家の裏でトッチェビを祀っているのだと理解し、噂したのである。そのことが他所の村に嫁いだり、他所から嫁をもらう際に障害になること

もあった。

トウィタルバンに対する祭祀儀礼を止めたのは50年ほど前のことである。4・3事件の際に、村の民家はもちろん、鍛冶業の施設もことごとく破壊されてしまった。もはや鍛冶屋の仕事を再開できないほどになっていたのである。そんな状況のなかで、村の有志たちが迷信打破運動の一環として〈トウィタルバンの止祭運動〉を展開したので、ほぼ27年くらいで各家庭とも祭祀を止め、それを祀っていたシル(甑)をうち捨ててしまったのである。それでも、他所の村と嫁のやり取りをする際には、今日に至るまで多少の影響がある。そのような場合には、完全に過去の信仰として消えてはいないのである。

以上の説明から次の2点がはっきりする。第1に、かつては村落内婚が多かったが、それとて村落内婚が望ましいとか、是非とも村落内での結婚を優先すべきとかいった村落内婚制(village endogamy)と結びつくものではなかった。つまり、村落内婚を優先させ、近隣諸村落との通婚に関してはそれより優先順位を落としたり、否定したりする考え方はなかったのである。むしろ、和順や沙溪のような近隣村落とは昔も今も婚姻関係は多いと語ってくれる。お互いの家庭の事情をよく理解していて、経済的にもつり合いのとれる者同士で仲媒結婚をするとなると、日頃のつき合いの範囲内での通婚にならざるをえなかったと説明されるのである。

第2に、徳修里は両班意識を有する者が多く住む中山間村であるが、配偶者の選択に際して両班同士に限定する傾向はない。逆に、非両班層が住むとされてきた海村を忌避することもない。つまり、優先的婚姻規定としての階級内婚制は認められない。韓国の婚姻規定を想起するときわめて希有な例と思われるのであるが、土地の民俗宗教(トツチェビ祭祀)との関係で階級内婚制を維持することは困難だったとの解釈が可能かもしれない。

## 5. 村落内婚と近隣村落婚

徳修里という一つの村落に関して、地域と数値とで示した通婚圏、および村人の説明する通婚関係の地域的構図について見てきた。両者を比較対照しながら、村落内婚の比率の高さやその延長としての近隣村落との婚姻といった捉え方を検討しよう。

数量によっても、村人の説明によっても村落内婚率の高さは歴然としている。現婚姻件数250件のうち105件が村落内婚であり、比率にすれば42%になる。李昌基が非常に高い比率であるとした「少なくとも30%内外(またはそれ以上)の村落内婚率」に比べても、はるかに高いのである。さらに、旧世代においてはその傾向がより鮮明になる。実に、155件中84件54.2%が村落内婚なのである。

「昔は60%、場合によっては70%ほどが『部落内』で結婚した」とする村人の説明は、旧世代の54.2%という数値からすれば、決して誇張された捉え方ではなさそうである。「70%」を字義どおり受け取るのではなく、むしろ、土地の人々の自文化・自社会についての大まかな説明の仕方と受け取ると、数量的な処理結果ともさほど大きく離れているものではないと理解できる。

このように実際の数値や村人の捉え方を見る限り、村落内婚を済州道の婚姻の重要な特徴と規定し、近隣村落との婚姻はその延長と解釈したくなるかもしれない。しかし、私はそのような捉え方には反対なのである。

先ほどまでとは逆に土地の人々の説明をまず検討し、そのうえでもう一度数量的に把握される通婚圏を再検討しよう。なぜなら、現地調査で得られた数量的資料については、どうしても現地の人々の捉え方、すなわち人々が観念世界で描いている通婚の地域的構図を知り、それを踏まえ参考にしながらか解釈を試みる必要があるからである。そうでないと、土地の文化の脈絡から数量のみを切り取って解釈することになりかねないのである。

村人は村落内婚が過去に多かったことを認める一方で、村落内婚制といえるほどの優先的規定はなかったこと、および近隣村落との通婚関係

も、過去から現在にわたって、結構あることを認めている。換言すれば、「お互いに部落の事情、家庭の事情を知っている者同士で」結婚するとなると、村落内婚は自ずから多くなったであろうが、平行して近隣諸村落との通婚関係も結構あったというのである。

「お互いに部落の事情を知っている者同士」という表現には微妙な意味合いがこもっている。徳修里で言うトウィタルバン、よそ者が言うトツチェビに対する信仰まで含んでいる。つまり、特殊な神を祀るあるいはかつて祀った村としての徳修里を理解してくれる者同士という意味合いがこもっているのである。

ここで肝心なことは「お互いに部落の事情」というのが微妙な民俗宗教にかかわる面がある一方で、明らかに近隣諸村落を念頭において発言しているという点である。決して、村落内のみ限定せず、近隣諸村落をも含めた範囲内で配偶者を選択したら、結果的に村落内婚が多くなったとの説明なのである。要するに、土地の人々は村落内における通婚が多かった事実を認めながらも、婚姻関係を結ぶ範囲としては近隣諸村落まで含めて捉えているのであり、村落内婚と近隣村落婚とをわざわざ区別し、分離することはしていないのである。換言すれば、自村落と近隣村落は通婚の範囲として連続的なのである。

そのことは私が水山二里で行った調査の結果ともよく符合する。そこでは村落内婚と二つの近隣村落婚とで82%を占める。そのことに対して土地の人々は「できるだけ近く」の者から配偶者を選択すると説明しているのである(津波 1990:78-79)。決して、村落内と近隣村落とを切り離してはいないのである。

徳修里の人々が村落内婚と近隣村落婚とを分離せず、「できるだけ近く」の理解し合える者同士で配偶者を選択したとする点は、是非とも確認し、踏まえておきたい。そのうえで、通婚圏に関する数値を理解し、解釈したい。

既述のとおり、旧世代では村落内から近隣村落、近接地域、遠方地域へと同心円的に距離が遠くなるにつれて、54.2%、32.3%、8.4%、5.2%と比率が低下していく。近隣村落と近接地域との間には明らかに数値上の落差がある。通婚圏全体から見ると、近隣村落の32.3%は決して低い

数値ではなく、村落内54.2%と合わせると、86.5%と大きな意味を持つのである。つまり、村落内婚と近隣村落婚とを分離し、切り離すのではなく、両者同時に捉えることで、通婚圏のなかでも、土地の大方の人々にとって最も意味のある範囲が理解できるのである。

その理解に立たずに両者を切り離し、村落内婚率の高さのみを強調すると、徳修里とは反対の事例すなわち村落内婚よりも近隣村落婚の比率が高い事例では解釈に困るのではなかろうか。たとえば、城山邑水山二里では村落内婚率は28%であるが、近隣の二つの村落との婚姻は54%にものぼり、両者合わせると82%を占める(津波 1990:78)。そのような場合、どうして村落内婚率が高く、近隣村落との婚姻はその延長と解釈せねばならないのであろうか。

さらに困るのは、徹底的に村落内婚率の低い事例である。たとえば、崔在錫が報告した城山邑三達二里の場合、村落内婚率はわずかに7.8%に過ぎない(崔在錫 1979:142)。それに対して李昌基は「一つの姓氏(光山金氏)が集団で居住しているので、同姓同本の不婚律によって村落内婚の可能性が大きく制限される特殊性があった。したがって、三達二里の事例は済州道の村落内婚を扱う資料として注目すべきものではない」と説明している(李昌基 1998:559)。まるで、済州道の村にして、済州島の村でないかのごとき扱いである。が、それとて村落内婚と近隣村落婚とを切り離さずに同時に捉えると、70.6%になり、特に例外的とは言えないのである。

要するに、土地の人々の説明、数量的資料のいずれをとっても、村落内婚と近隣村落婚とは切り離すべきではなく、連続的な枠として捉える必要があるのである。「婚姻圏がある一つの部落と近隣部落に集中している場合、部落内婚と近隣部落婚まで含む部落外婚とを機械的に区別する必要はないであろう」とする崔在錫の指摘は、その意味ではきわめて的確ものと評価されてしかるべきであろう。村落内婚と近隣村落婚とを機械的に区別し分離するのではなく、連続したものとして捉え、もしも必要とあれば、崔在錫のようにそれを認めたいうえで、その中における村落内婚を取り上げるべきなのである。

そうでないと、土地の人々の説明からかけ離れ、数量的資料に対する

研究者の解釈だけで濟州の婚姻の特徴が語られてしまうのである。その結果、三達二里に関するような発言まで飛び出すのである。三達二里にしても村落内婚率が低いからといって、近隣諸村落との婚姻を無視し、はるか遠方との通婚が多いということでは決してないのである。村落内婚と近隣村落婚とを切り離さなければ、特に例外的な扱いを必要とせず、まったく普通の濟州の村落として扱えるのである。

## 6. まとめ

濟州道の通婚圏の特徴を理解するに際して、李昌基は村落内婚と近隣村落婚とを切り離して村落内婚の重要性を強調するのに対して、私は逆に村落内婚と近隣村落婚とを切り離さず、連続的なものとして同時的に捉えることを強調したい。この両者の差異は一見些細なことに思えるかもしれないが、特定の文化・社会構造を理解する方法からすれば、きわめて大きな差異が背後にあると言わざるをえない。その点を明らかにしながら、結論を述べたい。

李昌基が濟州における村落内婚率の高さを強調する根拠は、すでに明らかにしたとおりであるが、それをさらに鮮明にするために次の発言も確認しておきたい。「村落内婚は陸地の農村地方にも存在するが、孤立した漁村や島嶼地方のような特殊な地域で比較的高い比率を見せている。しかし、濟州の村々は孤立性が認められないにもかかわらず、多くの村々で村落内婚の比率が高くなっており、濟州道の婚姻様式の一つの特徴と指摘されている」。

この発言に明らかなように、濟州の村落内婚率の高さは、陸地(韓国本土)の特殊な地域を除く、一般的な地域に比べてのことである。簡単に言えば、比較の対象は韓国本土に求められているのである。つまり、濟州の村落内婚率の高さはあくまでも韓国本土と比較すると、という条件付きなのである。その条件が付いている限りにおいては、正しい指摘といえるかもしれない。

しかし、問題はまさにそこから始まる。そう指摘したからといって、濟州の人々がどういふつもりで、村落内婚を行い、近隣村落婚を行って

きたのかという観念的側面が全然見えてこないのである。換言すれば、韓国本土との数量的比較に終始し、済州の人々の観念世界がまるっきり置き去りにされてしまっているのである。

そこで二つの問題点が浮かび上がってくる。一つはイーミックな文化<sup>8)</sup>の研究における統計モデルと構造モデルの関係である。私が統計モデルと構造モデルの双方に基づいているのに対し、李昌基の主張は統計モデルだけにに基づいているのである。イーミックな文化の研究における構造モデルの重要性は今さら私が強調するまでもないであろう<sup>9)</sup>。

もう一つの問題点は、数量の解釈に関して韓国本土との比較に止まっている点である。確かに、韓国本土との比較という条件付きならば、村落内婚率の高さは目につくであろう。しかし、それは所詮相対的なものであり、比較の対象の求め方によっては、また異なる説明も可能なのである。

たとえば、沖縄のように村落内婚が優先的婚姻規定として存在した事例と比較すると、済州の村落内婚率がきわめて高いとは必ずしも言えない。私が調査した沖縄のある村では、第2次大戦前までは村落内婚率が50%を越えていたし(津波 1997:116)、また沖縄の他の村々もほぼ同じ状況だと思われる。済州の30%前後という村落内婚率は、沖縄よりもむしろ戦前の日本本土のそれとほぼ同じ状況である(白井 1971:458)。

韓国本土との数量的比較のみで済州の婚姻の特徴を論じることは、たとえば、沖縄の婚姻の特徴を日本本土との数量的比較だけで論じることと同じである。それぞれの国におけるマージナルな文化をドミナントな文化との数量的比較だけで論じてみても、決してマージナルな文化そのものの研究には到達しえないのである。

以上の点を明らかにし、結論を述べたい。私はすでに述べたように、南済州郡城山邑水山2里の事例に基づいて、「両班の通婚圏の範囲は広く、常民のそれは狭いとするような階級差による通婚圏の範囲の違いは、済州島では認められない。韓国全域に共通する禁止的婚姻規定としての氏族外婚制と優先的規定としての階級内婚制によりながら、両班意識を持つ者、持たぬ者いずれも近処婚を行っている」としたのであった(津波 1990:84-85)。近処婚とは村落内婚と近隣村落婚とを包含する概

念であることを断ったうえで、それを徳修里の事例と比較し、若干修正しておきたい。

まず、徳修里では優先的婚姻規定としての階級内婚制が認められない。恐らく、特殊な民俗宗教との絡みでそれは理解されねばならぬであろうが、いずれにせよ、その認められない事例があることに配慮されねばならぬであろう。したがって、「韓国全域に共通する禁止的婚姻規定としての氏族外婚制と優先的規定としての階級内婚制によりながら」とせず、「韓国全域に共通する禁止的婚姻規定としての氏族外婚制によりながら」とすべきであろう。

次に、「両班意識を持つ者、持たぬ者いずれも近処婚を行っている」としたのは、不正確な表現で、「両班意識を持つ者、持たぬ者、いずれも大方は近処婚を行ってきたが、近年において遠方地域との通婚の比重が高くなってきている」とせねばならぬであろう。

これら2点を訂正し、濟州島を濟州と直して、次のようにその通婚圏の特徴を把握したい。「両班の通婚圏の範囲は広く、常民のそれは狭いとするような階級差による通婚圏の範囲の違いは、濟州では認められない。韓国全域に共通する禁止的婚姻規定としての氏族外婚制によりながら、両班意識を持つ者、持たぬ者、いずれも大方は近処婚を行ってきたが、近年において遠方地域との通婚の比重が高くなってきている」。

もしも必要ならば、村落内婚その他の要素に関しては、近処婚のなかの変異の幅と捉えることが可能であろう。極めて高い比率を見せる近処婚のなかで、村落内婚の比率が徳修里のように高い場合もあれば、三達二里のように低い場合もある。また、水山二里のように旧身分意識に基づく階級内婚制の認められる場合もあれば、徳修里のように認められない場合もある、という具合にである。

通婚圏研究の意義が「意味ある社会関係の範囲を把握」することにある(李昌基 1997:559)とする点は、私にとってもまったく異存のないところである。しかし、だからこそ村落内婚率の高さのみを濟州の婚姻の特徴として一方的に強調するのではなく、通婚圏全体を見渡し、その中における社会関係の最も濃密な部分を見極める必要があるのである。さらに、その変化の様相をも見極める必要があるのである。

注

- (1) 濟州道は濟州島を主島とする地方自治体、行政区である。日本で言えば、ほぼ県に相当する。紛らわしいことに、「道」も「島」も韓国語では [do:] と発音され、ハングルで表記されると、文脈による以外はまったく区別がつかなくなる。濟州道としては韓国本土の全羅南道にむしろ近い島々まで含んでおり、濟州島ではとても全域を含み込むことはできない。ただ、文化的には濟州島を中心とする地域と全羅南道に近い島々とは微妙に異なるようなので、ここではそう厳密にはなく、いささか曖昧さも残しながら、濟州島を中心とする地域の意で単に濟州としておきたい。それとて、濟州市あたりと混同される危険性がないわけではないが、市は市として明記したい。なお、地名がハングルで表記された韓国語の文献に関しては、その脈絡から明らかに「濟州道」と判断できるものを除いて、一貫して「濟州島」と訳した。私が用いる「濟州」に近いニューアンスとしてである。
- (2) その目的については各巻冒頭の「発刊の辞」を参照のこと。また、年度別の刊行状況については引用文献参照のこと。
- (3) 現地調査は沖縄国際大学南島文化研究所が組織した科学研究費による海外共同研究チームの一員として行った。研究所の関係者には記して感謝申し上げる次第である。
- (4) その時点で私が検討した諸研究は、金興植(1983)、李昌基(1983)、崔在錫(1979)、佐藤(1986)などである。
- (5) 徳修里の略図は徳修国民学校(1987)に掲載されたものをもとにし、若干修正を加えた。
- (6) 徳修里老人会の宋英敏会長、許基絃総務、および里事務所の金東振里長には話者の紹介その他、いろいろとお世話をいただいた。記して感謝申し上げます。また、その調査で、難しい濟州方言の通訳をしていただいた東京大学大学院の姜京希さんにも心からお礼を申し上げます。
- (7) 村の有志たちで<止祭>を決めたのではなく、宋氏の門中会議で決定したとの記述もある(徳修国民学校 1987: 46)。民俗宗教の変化に関する興味深い側面であるが、残念ながら今回はどちらが正しいのか

濟州の通婚圏に関する再検討

判断できないままに終わった。

- (8) etic・emicをここでは吉田(1984)にならって、エティック・イミックと読むことにしたい。
- (9) 沖縄の家族に関して構造モデルに比重をおきながら、統計モデルまであつかった田中の論文(1985)を、身近な適用例として挙げておきたい。

引用文献

- 崔在錫 1979 『濟州島の親族組織』(韓国語) 一志社 ソウル
- 濟州道 1993 『濟州の民俗Ⅰ 歳時風俗・通過儀礼・伝承演戯』
- 1994 『濟州の民俗Ⅱ 生産技術・工芸技術』
- 1995 『濟州の民俗Ⅲ 説話・民謡・俗談』
- 1996 『濟州の民俗Ⅳ 衣生活・食生活・住生活』
- 1997 『濟州の民俗Ⅴ 民間信仰・社会構造』(以上韓国語)
- 李昌基 1997 『社会構造篇 第2章 家族と親族』濟州道誌編纂委員会『濟州の民俗Ⅴ 民間信仰・社会構造』(韓国語) 濟州道
- 金興植 1983 『韓国の発見 濟州道』(韓国語) ブリッキングナム社 ソウル
- 高昌錫 1993 『解説』『濟州大静県徳修里戸籍中草Ⅰ』(韓国語) 耽羅文化研究所
- 小山隆 1954 「通婚圏の意味するもの」小松堅太郎編『高田先生古希祝賀論文集 社会学の諸問題』有斐閣
- 佐藤信行 1976 「濟州島の『サドン』」南島史学会編『南島—その歴史と文化』国書刊行会
- 白井宏明 1971 「つうこんけん 通婚圏」大塚民俗学会編『日本民俗事典』 弘文堂
- 田中真砂子 1986 「沖縄の家族」原ひろ子編『家族の文化誌』弘文堂 徳修国民学校
- 1987 『徳修郷土誌』(韓国語) 徳修国民学校

徳修里民俗保存会

- 1998 「第7回伝統民俗再現」(韓国語) 徳修里  
津波高志 1990 「済州島の通婚圏」杉山晃一・桜井哲男編「韓国社会の文化人類学」弘文堂  
吉田集而 1984 「エティックとイーミック」和田祐一・崎山理編「現代の人類学 言語人類学」至文堂

付記 1

本論は平成8~10年度文部省科学研究費補助金国際學術研究(研究代表者波平勇夫沖繩國際大學教授)による現地調査に基づいている。沖繩國際大學から出版豫定のその研究成果報告書には紙幅の関係で、本論を簡略にした報告が掲載されるはずである。

付記 2

本論は「琉大アジア研究」第2號(琉球大學法文學部アジア研究施設, 1998)に掲載された論文を翻譯したものにあり。

# 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討\*

-安德面德修里的 사례를 중심으로-

津波 高志\*\*

번역 강경희\*\*\*

## 〈目 次〉

- |             |                |
|-------------|----------------|
| 1. 머리말      | 4. 村人の 설명      |
| 2. 德修里的 概況  | 5. 村落內婚과 近隣村落婚 |
| 3. 德修里的 通婚圈 | 6. 맺음말         |

## 1. 머리말

한국최남단에 위치한 濟州道<sup>1)</sup>에서는 1993년부터 1997년까지 매년 1권씩 濟州文化資料叢書「濟州의 民俗」을 간행했다. 그 목적은 자기들의 전통문화를 재발견하고 全體像을 정립해서 새로운 고가치의 문화를 창출하려는 의도<sup>2)</sup> 뿐만 아니라 제주의 민속문화 전분야에 걸친 研究史를 정리하려는 배려가 숨어 있다. 제주민속문화의 全體像을 파악함에 있어서는 매우 귀중한 총서이고 현재 재로선 그 이상의「濟州民俗文化事典」은 없다.

그 총서중에서도 내자신의 전문분야와의 관계로 인해서 아주 흥미 깊게 읽은 것은 제5권 『濟州의 民俗 v 民間信仰·社會構造』에서 「社會構造篇」이었다. 거기에서 「第二章 家族과 親族」은 李昌基(嶺南大學教授)에 의해 정리되어 있다. 구체적으로 내용을 살펴보면 제1절에서는 제주의 가족과 친족에 관한 기존의 연구를 概觀했고, 제2절에서 제6절까지 다섯 개의 절을 통해서는 이제

\* 이 논문은 『琉大 아시아 研究』 제2호(琉球大學 法文學部 아시아 研究 施設, 1998)에 게재된 것을 번역한 것이다.

\*\* 琉球大 教授 社會人類學 專攻.

\*\*\* 東京大學 博士過程.

까지 거론된 주요한 논점을 집필자 자신의 시점에서 하나씩 하나씩 정리하고 있다. 경철할 견해가 아주 많이 포함되어 있으며 그 분야에 관해서는 가장 새롭고 상세히 총괄하고 있다.

그러나 나는 거기에 전개된 집필자의 견해에 관해서 전부 동의 할 수는 없다. 몇 가지 점에서는 동의 할 수가 없는 입장이다. 이 글에서는 그 하나인 제주의 통혼권에 관해서 내가 이번의 현지조사에서 입수한 安德面 德修里의 사례<sup>3)</sup>에 의거해서 검토해 보고자 한다.

먼저 제주의 통혼권에 관한 종래의 연구를 李昌基氏가 어떤 식으로 파악하고 있는가를 살펴보고자 한다. 李氏에 의하면 「지금까지 제주도의 지역적 통혼권을 논하는 자리에서 제주도 혼인의 특징을 村落內婚으로 볼 것인가 아니면 인근 마을까지를 포함하는 近處婚(隣近村落婚) 또는 面內婚으로 볼 것인가 하는 논의가 있었다. 그러나 필자는 이러한 논의가 제주도 혼인의 특징을 이해하는데 별 도움이 되지 못한다고 생각한다.」라고 말하고 있다. (李昌基 1997:559)

인용문헌을 명시하고 있지는 않지만 1990년도의 시점에서 제주의 통혼권에 관한 위와 같은 검토를 한 것은 사실 나 자신이기도 하다.<sup>4)</sup> 나는 남제주군 성산읍 수산 2리의 사례에 바탕을 두고 「양반의 통혼권의 범위는 넓고 일반서민의 통혼권은 좁다고 하는 階級差에 의한 통혼권의 범위의 차이는 제주도에서 인정될 수가 없다.

한국전역에 공통되는 禁止的婚姻規定으로써의 氏族外婚制와 優先的規定으로써의 階級內婚制에 의하면서 양반의식을 지닌 자와 지니지 않은 자 어느쪽이든지 近處婚을 행하고 있다」라고 했다. (津波 1990:84~85). 이에 반해 李昌基氏는 「제주도 혼인의 특징을 이해하는데 별 도움이 되지 못한다고 생각한다」라고 하고 있다.

그리고 그 근거로 다음과 같은 설명을 전개하고 있다. 「촌락내혼을 관습이나 법률이 강제하지 않는 한, 그리고 마을 외부 사회와의 사회관계가 철저히 차단된 고립사회가 아닌 한 모든 사람들이 마을 안에서 혼인한다는 것은 불가능한 일이다. 제주도와 같이 관습이나 법률이 촌락내혼을 강제하지도 아니하고 또 혼인 가능한 마을들이 인근에 널리 분포되어 있는 상황에서 조사된 거의 모든 마을들이 적어도 30%내외(혹은 그 이상)의 촌락내혼을 보이고 있다면, 그렇게 될 수밖에 없는 특수한 사정이 전제되지 않는 한, 이 수치는 매우 높은 비율임에 틀림이 없으며 따라서 촌락내혼을 제주도 혼인의 중요한 특징으

로 규정하는 데 전혀 무리가 없다고 본다. 인근 마을과 혼인하는 비율이 높은 것은 촌락내혼의 연장으로 해석해야 하지 않을까 한다。」(李昌基 1997:559)

이와 같이 李昌基氏에 의하면 촌락내혼의 비율의 높은 것이 제주도 혼인의 하나의 큰 특징으로 인근촌락과의 혼인율이 높은 것도 촌락내혼의 연장으로 되어버리는 것이다. 또한 「인위적으로 행정적인 구획을 기준으로 面內婚이니 郡內婚이니 또는 道內婚이니 하는 논의는 의미있는 사회적 관계의 범위를 찾고자 하는 혼인권 논의에서는 전혀 무의미한 일이라 아니할 수 없다」라고 말하고 있다. (李昌基 1997:559).

나는 적어도 面內婚 이하의 문제에 관해서는 대략적으로 동의하고 있다. 그러나 촌락내혼의 비율이 높다고 제주의 혼인의 특징으로 일방적으로 강조를 해도 괜찮은 것일까? 또 인근촌락과 결혼하는 비율이 높은 것을 촌락내혼의 연장으로 해석이 가능한 것인가? 이러한 두 가지 점에 관해서는 아직도 검토의 여지가 있다고 생각된다. 주로 德修里의 자료에 의거하여 이 두 가지 점을 중점으로 재검토를 시도해 보고자 한다.

덧붙여 본론에서 쓰고있는 통혼권이라고 하는 것은 어떤 촌락의 성인들이 마을내 아니면 외부의 사람들과 맺어지는 통혼관계의 지역적 범위를 말하며, 그것은 어떤 시간내에 이루어진 통혼관계를 지역별로 구분한 횡수의 백분율을 나타낸다(小山 1954:397, 白井 1971:458). 통혼권은 오늘날 일본에서는 중요한 연구과제는 아니지만, 다음과 같이 예전에 小山이 지적한 여러 점은 현시점에서 제주의 문화·사회의 연구에서는 결코 중요성을 잃지 않았다고 생각된다.

즉 통혼권은 「혼인관계의 범위와 집중도를 나타내는 지표이며, 또 그 배후에 있는 여러 종류의 사회를 시사하는 지표이고, 사회관계를 객관적으로 측정하려고 할 경우에 하나의 유력한 실마리가 된다」(小山 1954:395). 그리고 「통혼권이 사회관계의 연구에서 존중되어지는 중요한 근거는 그것이 시대적 변화를 양적으로 나타내는 하나의 객관적 지표가 될 수 있다는 점이다.」(小山 1954:399). 다시 말하면 제주에서의 농밀한 사회관계가 어떠한 지역적 범위 내에서 만들어지고, 그것이 어떻게 변화되었는가를 아는데 유력한 지표가 되는 것이 통혼권인 것이다.

## 2. 德修里的 概況

德修里는 제주도 남제주군 안덕면에 속한 행정상 말단의 단위이다. 일본식으로 말하면 安徳村字德修라고 할 수 있다. 濟州島에서 보면 서남쪽 구석에 위치하고 있다(지도1참조). 덕수리의 바로 옆에는 관광지로 유명한 산방굴사가 있는 산방산이 있다.

덕수리의 공식적인 통계에 의하면 1997년 12월말 현재 戶數는 305戶, 인구는 1,112명(남553명, 여559명)으로 되어있다(德修里民俗保存會 1998:4). 그러나 그것은 어디까지나 서류상 내용이고, 뒤에 보는 바와 같이 실제로 덕수리에 거주하고 있는 주민의 세대수와 인구는 그보다 적다.

주민들은 대부분 농업을 생계로 하고 있다. 경지면적은 밭 338ha, 과수원 389ha로 일 가구당 평균 경지면적은 濟州島 평균의 약 두 배에 달하고 있다. 환금작물로 재배되는 것은 주로 감귤과 깨 등이다.

그러나 그것은 1970년대 이후의 일로 그 이전에는 농업을 주업으로 하면서 목축을 겸업으로 했다. 지금은 20가구 정도만 목축을 하고 있다. 그 당시의 작물은 보리, 조, 콩, 감자, 깨 등이었다. 1948년에 일어난 4·3사건 이전에는 대장일을 하는 마을로 유명했었다.

전하는 바에 의하면 약400년 전에 마을이 형성되었다고는 하지만 그 형성에 관한 확실한 사실은 알 수 없다. 그러나 史料에 의하면 1831년 自丹里에서 分里해서 新堂里가 형성되고, 그것이 1840년에 德修里로 改名되어 오늘날에 이르고 있다(高昌錫 1993:7).

덕수리는 세 개의 自然集落으로 되어있다(그림1 참조).<sup>5)</sup> 그 고장 사람들은 「上部落」, 「東部落」, 「西部落」으로 구별하고 있다. 상부락이 가장 규모가 작은 약20가구 정도이고 나머지는 동부락이 1/3, 서부락이 2/3을 차지하고 있다.

성씨별로 보면 礪山宋氏가 가장 많고 다음으로는 金海金氏, 慶州金氏로 이어진다. 이 세 개의 성씨가 덕수리의 약60%정도 된다. 礪山宋氏와 慶州金氏는 서부락에 많이 거주하는 반면 金海金氏는 동부락에 많다.

덕수리에서 옛날 대장간 일을 처음 시작한 것은 송씨가문 사람이라 전해진다. 지금부터 250여년 전에 宋世万에 의해 그 기술이 전해졌다고 한다. 대장업 그 자체는 완전히 오늘날에는 자취를 감추었고, 일년에 한번 열리는 傳統民俗

## 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討

再現大會에서 밖에 예전의 모습을 볼 수 없게 되었지만 대장간에서 모셔지는 독특한 민간신앙에 관해서는 오늘날까지도 무시할 수가 없다. 표면상으로는 알 수 없지만 잠재적으로는 오늘날에도 배우자의 선택에 다소의 영향을 끼치고 있는 것 같다.

그 점에 관해서는 덕수리의 통혼권에 직접 관련되고 있으므로 여기서 언급하고자 한다.

덕수리의 각 가정에서는 50년 정도 전 까지만 해도 뒷하루방이라 불리워지는 신을 모시고 있었다. 뒷하루방이라는 뜻을 풀이해보면 「뒤에 있는 할아버지」란 뜻이다. 집 안채의 뒤에 모셔졌다. 설명적인 뉘앙스를 덧붙이면 영감신(令監神)이라고도 한다. 대략 50여년 정도 전 부터 모시고 있지 않다고 하지만 그에 대한 의례나 신앙에 대해서는 아직까지도 마을사람들이 선명하게 기억하고 있다.

안채 뒤에 된장, 간장, 김치 등을 담은 항아리를 두는 장소인 장독대라 불리어지는 곳이 있다. 그 근처 돌담구석에 시루라고 불리는 단지를 얹어놓고 그 위에 평평한 돌을 놓았다. 그것을 뒷하루방이라고 부른 것이다.

제사나 명절 때 집에서 제사가 있을 때마다 주부가 제물을 조금씩 시루의 구멍 안에 넣었다. 즉 뒷하루방에게 제물을 드리는 것이다. 물론 그때는 蓋石을 댄다. 이러한 제사 이외에도 일년에 한번 가을에 午日을 골라 밤 열시 경 주부가 뒷하루방이 좋아하는 수수단고(송편)를 올렸다.

뒷하루방은 남성(할아버지)이고 이것을 모시는 사람은 여성(주부)이다. 뒷하루방이 남자라서 여자를 따라 간다고 한다. 여자가 시집갈 때 시집에 같이 가는 것이다. 단 시집에 뒷하루방이 모셔져 있을 때는 새로 모실 장소를 만들지는 않았다. 모셨던 곳에 모시면 된다. 뒷하루방은 그것을 모시는 여성과 성관계를 가지는 경우도 있다고 믿어지고 있었다.

뒷하루방은 원래가 대장간의 신이었다고 한다. 덕수리는 4·3사건 이전까지만 해도 濟州島 유일의 대장간마을로 유명했었다. 덕수리에 그 기술을 전한 사람이 礪山宋氏의 선조여서 마을에서 가장 가구수가 많고 유력한 一族인 송씨 가문을 중심으로 그 기술이 전해졌다.

4·3사건 이전에는 취사용구나 농기구를 濟州島의 전역에 제공해서 경제적으로도 매우 윤택했었다.

대장업을 하는 송씨 가문에서 다른 가문에 시집갈 때 그 여성과 함께 뒷하

루방도 따라갔다. 예를 들어 시집이 대장업을 안 해도 농업을 보살피 풍요를 부르는 신으로 모셔졌다. 결국 본래는 대장간의 수호신이었던 것이 혼인관계를 통해 농업의 수호신이 되었다고 볼 수가 있다. 대장업이든 농업이든 뒷하루방을 모시면 부자가 된다고 믿었던 것이다.

### 3. 德修里의 通婚圈

덕수리에 있어서 부락내에서의 결혼건수나 근린촌락과의 혼인건수 등을 먼저 수치화해 보려고 한다. 그러면서도 단지 현재의 결혼관계를 지역적인 범위에서 수치화하는 것이 아니라 세대에 의한 변화도 살펴보는 데 유의하고자 한다.

덕수리의 概況에서 가구수는 305戶라고 소개했지만 실제로 내가 조사한 바에 의하면 272세대 밖에 없었다. 결국 리사무소의 서류상의 주민과 실제 거주하고 있는 주민과의 사이는 상당한 차이가 있는 것이다. 혼인건수를 조사할 때에 기본적인 자료가 되는 世帶라고 하는 것에 대해 간단히 설명하고자 한다.

여기서 世帶라 하는 것은 그곳에서는 식구(食口)로 칭해져서 同居, 同竈, 同財를 이루는 사회단위를 가리킨다. 일상생활의 기본적인 단위로 일반적인 마을사람들은 물론 각 서로의 식구 구성원에 대해서도 잘 알고 있다. 또한 연간 2만5천원의 里稅가 징수되는 단위이기도 하며 리사무소는 그것을 잘 파악하고 있다. 그러나 里稅에 있어서 생활보호대상 세대는 면제되고 있으며 노인부부의 가구에 대해서는 남편이 75세 이상, 여성 혼자 사는 경우에는 70세 이상은 면제되어지고 있다.

그러면 272세대에 거주하는 부부를 대상으로 세대주의 부인출신지를 구분하는 방식, 바꿔 말하면 결혼해서 전입(婚姻入家)한 경우만 세는 방식으로 통원권을 살펴 보려고 한다(婚姻出嫁에 관해서는 시간 제약상 조사 할 수 없었다). 婚入에만 제한을 하더라도 한 세대가 꼭 부부로 구성되어져 있다고는 할 수 없고, 세대주가 미혼자인 경우에는 算定하는데 기초가 되는 자료에 있어서 약간의 양해가 필요하다.

## 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討

세대주의 妻이외에 母親, 또는 아들의 妻가 함께 사는 세대는 10세대가 있었다. 독신자가 세대주로 되어있는 세대도 12세대가 있었다.

또 이번의 조사는 본인에게서 직접 조사해서 들은 것이 아니여서 妻의 출신지를 명확히 하지 못한 것도 12건이나 있다. 그 외에 재혼, 妻死亡, 부부가 타 지역 출신자, 부인만 덕수리 출신자라고 하는 경우를 합쳐서 8건이 있었다. 그것들은 전부 통계에서 제외 시켰다.

이러한 이유로 272세대에서 250건의 혼인건수를 얻었다. 그 지역의 내역을 나타내는 것이 표1의 「現件數」의 欄이다. 지역에 관해서는 安徳面和 大靜邑만을 부락으로 했다.

단 大靜邑 중에 仁城, 安城, 保城의 세 부락은 합쳐서 大靜으로 했다. 이 3개의 마을은 조선시대말기까지 하나의 마을로 大靜城內에 있었기 때문에 오늘날도 하나로 해서 대정이라 불려지고 있기 때문이다. 또 上攀里와 下攀里도 일일이 구별하지 않고 攀瑟浦라고 불려지고 있기 때문에 하나로 통일했다. 安徳面和 大靜邑외에는 市, 邑, 面, 陸地(本土)와 같이 크게 나누었다. (참고상, 西歸浦市에서 舊中文面만은 분리 했다).

다시 그 「現件數」를 世代별로 구분한 것이「舊世代」와 「新世代」의 欄이다. 대략적인 구분이지만 남편이 50대 이상과 40대 이하 둘로 구분했다. 요컨대 남편이 1947년 이전에 태어난 사람을「舊世代」, 48년 이후에 태어난 사람을 「新世代」로 설정했다. 남편이 사망한 경우 부인 본인의 연령을 기준으로 삼았다. 「不明」의 欄은 부부 어느 쪽도 연령이 불분명한 것을 말한다.

표1은 덕수리를 예로 들어 보면 다음과 같은 것을 파악할 수 있다. 수치화의 대상인 지금의 250쌍의 부부 중 105쌍은 덕수리 출신자끼리의 부락내의 결혼으로 그 중에서 84쌍은 구세대, 18쌍은 신세대로 분류된다. 또 세대불명의 부부는 3쌍이 있다.

丑1 地域別 世代別 婚姻件數

地 域		現 件 數	舊 世 代	新 世 代	不 明
安 德 面	德 修	105	84	18	3
	沙 溪	25	11	13	1
	和 順	20	13	7	
	西 廣	14	9	5	
	柑 山	10	6	4	
	上 倉	4	1	3	
	東 廣	1	1		
	廣 坪	1	1		
大 靜 邑	大 靜	23	11	12	
	摹 瑟 浦	2	2	0	
	加 波	2	1	1	
	武 陵	1	1		
기  타	舊中文面	7	6	1	
	西歸浦市	12	2	10	
	翰 京 面	1		1	
	翰 林 邑	4	2	2	
	涯 月 邑	1		1	
	濟 州 市	2		2	
	舊 左 邑	1			1
	南 元 邑	4	1	3	
	表 善 面	1	1		
	城 山 邑	1		1	
	楸 子 面	1	1		
	陸 地	7	1	6	
計		250	155	90	5

### 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討

그러면 표1의 지역을 거리와 혼인건수와의 상관관계에 착목해서 네 개의 지역으로 구분했다. 自村落, 近隣村落, 近接地域, 遠方地域이다. 표1의 「現件數」, 「世代」, 「新世代」의 각 난을 이 네 개의 지역으로 나누어서 누적차까지 더해 표시한 것이 「표2. 덕수리 통혼권」, 「표3. 덕수리 구세대 통혼권」, 「표4. 덕수리 신세대 통혼권」인 것이다. 自村落 즉 덕수리 이외에 관해서는 구분방법도 명확히 하면서 지역에 관한 수치를 확인하려고 한다.

표2. 德修里通婚圈

地 域	自村落	近隣村落	近接地域	遠方地域	計
事 例 數	105	92	18	35	250
百 分 比	42	36.8	7.2	14	100
累 積 比	42	78.8	86	100	·

표3. 德修里舊世代通婚圈

地 域	自村落	近隣村落	近接地域	遠方地域	計
事 例 數	84	50	13	8	155
百 分 比	54.2	32.3	8.4	5.2	100.1
累 積 比	54.2	86.5	94.9	100.1	·

표4. 德修里新世代通婚圈

地 域	自村落	近隣村落	近接地域	遠方地域	計
事 例 數	84	41	5	26	90
百 分 比	20	45.6	5.6	28.9	100.1
累 積 比	20	65.6	71.2	100.1	·

부락내에서의 결혼은 250건의 현재 혼인 건수 중 105건을 포함해서 비율로 따지면 42%가 된다. 그것을 또 구세대와 신세대로 나누면 155건 중 84건 즉, 54.2%가 촌락내 혼을 나타내고 있지만, 신세대에서는 90건 중 18건으로 20%

로 감소하고 있다. 즉 촌락내혼율의 높음은 구세대에서 특히 뚜렷한 양상을 나타내고 있다. 近隣村落은 거리상으로는 수km 이내의 범위에 위치한 촌락들을 말한다. 安徳面 沙溪, 和順, 西廣, 柑山, 大靜邑 大靜 등에서의 혼인 건수가 10건 이상의 마을들 뿐 이다. 이들 혼인 총 건수 250건에 포함된 건수와 비율은 92건 36.8%이다.

이러한 근린촌락과의 혼인 건수 및 비율을 구세대와 신세대로 나누면 의외의 사실이 나타난다. 구세대에서는 155건 중 50건인 32.3%이고, 신세대에서는 90건 중 41건인 약 45.6%가 된다. 요컨대 근린촌락과의 혼인관계는 촌락내의 혼인과 같이 신세대에 있어서는 감소하고 있지 않음을 알 수 있다.

근접지역이라는 것은 위의 근린촌락보다는 거리상으로 멀리 떨어져 있지만, 덕수리와 같은 安徳面 그렇지 않으면 동서에 직접 인접한 大靜邑 아니면 舊中文面의 부락들을 말한다. 舊中文面에 대해서는 촌락마다 건수를 명백히 할 수 없었지만, 어쨌든 이 지역의 여러 부락의 경우 혼인 건수는 數件以內 정도이다.

근접지역의 혼인 건수와 비율은 현건수 250건 중 18건인 7.2%이고, 구세대에서는 155건 중 13건인 8.4%, 신세대에서는 90건 중 5건인 5.6%이다. 이 수치만으로는 단번에 어떤 의미가 있을 것이라고는 생각되지 않지만, 그러나 다음의 遠方地域과 비교 해 보면 그 나름대로의 의미를 내포하고 있음을 알 수 있다.

원방지역은 근접지역보다 먼 거리의 지역들 이다. 표1에서는 「기타」로 일괄한 지역들이다. 濟州道內의 지역들은 물론 육지(본토)까지 포함하고 있다. 그것의 현건수가 차지하는 비율은 250건 중 35건인 14%로 그 중 구세대는 155건 중 8건인 5.2%이고, 신세대는 90건 중 26건인 28.9%이다. 촌락내혼과는 반대로 원방지역과의 혼인은 명백히 신세대쪽이 급증하고 있다. 구세대에서는 근접지역보다는 이 원방지역의 혼인 건수가 적음에도 불구하고 신세대에서는 반대로 그 수치가 높아가고 있다.

세대를 염두하면서 덕수리의 지역적 통혼권을 정리하면 다음과 같다. 구세대에서는 촌락내에서 近隣村落, 近接地域, 遠方地域으로 동심원적으로 거리가 멀어질수록 54.2%, 32.3%, 8.4%, 5.2%로 비율이 떨어지고 있다. 그러나 신세대에서는 촌락내 20%, 近隣村落 45.5%, 近接地域 5.6%, 遠方地域 28.9%로 동심원적 구도에 변화가 일어나고 있다. 명백히 촌락내혼의 비중이 줄어들고 원방

## 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討

지역과의 혼인의 중요성이 증가되고 있다. 참고로 두 세대간의 통혼권을 그래프로 표시해 보려고 한다. (그래프1. 구·신세대의 통혼권)

단, 동심원적 구도의 변화는 단순히 촌락내혼이 감소한 것으로 원방지역과의 혼인이 증가했음을 의미하는 것은 아니다. 근린촌락과의 혼인도 증가되고 있다. 요컨대 통혼권의 광역화는 촌락내혼의 비율의 저하를 일으키는 물론 근린촌락과의 혼인관계와 관련된 방향으로 움직이고 있다.

### 4. 村人의 說明

여기에 제시된 자료는 주로 덕수리 노인회의 2명의 회원(60대와 70대 각 1명)으로 부터 들은 것을 정리한 것이다. 그러나 들은 내용은 혹시나 해서 다른 몇몇의 노인에게도 다시 듣고, 또 젊은 세대의 대표자로 리사무소의 직원(40대)의 이야기도 참고로 하고 있다.<sup>6)</sup> 나의 견해로는 노인회의 2사람의 설명은 대략 덕수리의 노인 세대를 대표하고 있다고 생각된다. 다음 「我夕(우리)」라고 하는 것은 직접적으로는 그 2명의 회원을 가리키는 것이지만, 포괄적으로 보면 대략 덕수리의 60대에서 70대의 노인들이라고 봐도 좋을 것이다.

우리가 젊었을 때에는 거의 대부분 중매결혼을 했다. 서로가 결혼식 당일까지 얼굴조차 모르는 경우가 있었다. 지금도 중매 결혼을 하고 있지만 대부분 연애 결혼으로 변해가고 있다. 젊은이들은 마을을 떠나 「육지」나 「제주시」등에서 생활을 하게 되면서 여기저기 사람들과 알게 되고 외부 사람과의 결혼이 증가되어짐은 당연하다. 그러나 그것은 옛날 일이 아니고 20여 년 전 아니면 기껏해야 30여 년 전부터의 일인 것이다. 우리가 젊었을 때에는 대부분 같은 「부락내」에서 결혼했다. 60%-70%정도는 그렇게 했을 것이다. 그러나 부락내 사람과 부득이 결혼해야 한다면 부락내 사람과 결혼하는 것이 바람직하다든지, 혹은 다른 마을의 사람과 결혼하면 안 된다고 하는 것은 없었다. 옛날은 생활 구역이 대부분 부락 안에서 이루어졌기 때문에 다른 지역의 사들과 교류할 기회도 없었고, 서로간의 양쪽 부락의 사정, 가정의 사정을 잘 알고 있는 사람으로 경제적인 조화를 고려해 상대를 골라서 자연히 부락내에서 결혼하는 경우가 많았던 것이다.

덕수리는 3개의 集落으로 되어 있다. 부락내에서 결혼한다고 할 때의 부락은 덕수리 3개의 集落, 즉 東部落, 西部落, 上部落을 포함하고 있다. 결코 덕수리 내의 하나의 부락을 일컫는 것은 아니다.

部落 以外와의 결혼 관계도 옛날부터 꽤 있었다. 특히 근처의 마을, 즉 和順, 沙溪, 柑山, 大靜 등과의 결혼이 많았는데 이는 예나 지금도 많다. 화순과 사계는 어촌인데 반해 덕수리는 원래 물질을 하지 않았기 때문에 덕수리에 시집가면 해녀조합에서는 덕수리 사람으로 다루어서 해녀로서의 권리를 상실한 것으로 간주했다. 덕수리에서 사계나 화순에 시집가도 어릴 적부터 물질을 안 했었기 때문에 물질작업은 할 수가 없었다. 그러나 그 권리는 행사할 수 있었다.

덕수리에서 남서방향에 위치한 仁城, 安城, 保城 3개의 마을과의 결혼은 風水적인 요인으로 별로 환영받지 못했다. 잘은 모르지만 기가 드세었기 때문인 것 같다. 옛부터 그쪽 사람과 결혼하면 실패한다고 전해지고 있다. 단순히 전해지고 있는 것이 아니라 실질적으로 이혼율이 높다. 실제 그런 사실이 지금까지 나타나고 있다. 우리는 그 3개의 마을을 하나로 모아서 大靜村 (Tejngkol)이라 부르고 있다. 조선시대 말기까지 그 3개의 마을은 하나의 마을로써 대정 성내에 있었기 때문에 오늘날까지도 그렇게 불려지고 있다.

덕수리는 원래부터 양반이 많은 중산간 부락이지만 어촌과의 결혼을 싫어한 다든지 기피하는 경우는 없었다. 반대로 덕수리에 대해 주변 마을들은 도채비 마을(tocchebi maoul:妖怪村)이란 소문으로 혼인관계를 피하는 경우가 있었다. 지금도 그 경향이 없다고는 할 수 없다. 옛날 덕수리는 대장간으로 변성한 마을이었다. 밤하늘에 불꽃이 튀는 것을 보고 주변 마을 사람들은 도채비라고 소근거렸다. 밤에 여기저기서 번쩍번쩍거리는 빛인 妖怪火(heoppul)가 도채비로 그것을 오해한 것이다.

도채비를 덕수리마을 사람들이 모시고 있다고 주변 마을 사람들이 소근거리는 이유는 단순히 대장간의 불 뿐 만이 아니다. 덕수리 사람들이 대장간 안에 모시는 뒷하루방(twitharubang) 신앙과도 깊은 관계가 있다.

덕수리의 사람들은 대장업이나 농업에서 부자가 되게 하는 수호신으로 뒷하루방을 모셨지만 다른 지역의 사람들은 그렇게 이해하지는 않았다. 밤하늘에 튀는 불꽃이 도채비라고 하면 뒷하루방은 바로 집 뒤에 도채비를 모시고 있다고 생각해서 소근거린 것이다. 그 점이 다른 마을에 시집을 간다든지 다른 지역에서 시집을 올 때에 장애 요인이 되는 경우도 있었다.

## 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討

뒤틀하루방에 관한 제례를 멈춘 것은 50여 년 전의 일이다. 4·3 사건 때 마을의 민가는 물론 대장간의 시설마저 파괴되고 말았다. 이제는 대장간의 일을 다시 할 수 없게 되었다. 그런 상황에서 마을의 유지들이 미신 타파 운동의 하나로 <뒤틀하루방 止祭運動>을 전개해서 대략 2년 후에는 각 가정에서도 제사를 금하고 그것을 모시고 있던 시루를 버렸다.<sup>7)</sup> 그렇지만 다른 마을과 혼사가 이루어질 때는 오늘에 이르러서도 다소의 영향을 끼치고 있다. 이런 경우에는 완전히 과거의 신앙으로써 사라졌다고는 볼 수 없을 것이다.

위의 설명에서 다음과 같은 두 가지 점이 명백히 나타난다. 첫째는 옛날에는 촌락내혼이 많았지만, 그것이 촌락내혼이 바람직하다든지 부득이 부락내에서 결혼을 우선시 하는 村落內婚制(Village endogamy)와 관련되는 것은 아니었다. 요컨대 촌락내 혼을 우선시 해서 근린 부락들과의 통혼에 대해서는 촌락내혼 보다 우선 순위를 떨어뜨린다고든지 부정한다든지 하는 생각은 없었던 것이다. 오히려 화순이나 사계와 같은 근린촌락과의 결혼 관계는 예나 지금이나 많다고 한다. 서로간의 집안 사정을 잘 알고 경제적으로도 조화가 되는 사람과 중매결혼을 하면 평소 교제 범위 안에서의 통혼이 될 수 밖에 없었다고 설명되어지는 것이다.

둘째, 덕수리는 양반 의식을 지닌 자가 많이 살고 있는 중산간 마을이지만, 배우자의 선택에 있어서는 양반끼리 해야된다는 제한적인 경향은 없다. 역으로 비양반층이 살고 있는 어촌을 기피하는 일도 없다. 결국 우선적 혼인규정으로써의 계급내혼제는 확인 할 수가 없다. 한국의 혼인 규정을 상기하면 매우 희박한 예로 생각되어지지만 그 지방의 민속종교(도채비 제사)와의 관계로 계급내혼제를 유지하는 것은 곤란했었다는 해석이 가능할 지도 모른다.

## 5. 村落內婚과 近隣村落婚

덕수리라고 하는 하나의 부락에 대해 지역과 수치로 나타낸 통혼권 및 마을 사람들이 설명하는 통혼관계의 지역적 구도에 대해 살펴 봤다. 두 개를 비교·대조하면서 촌락내혼의 비율이 높은 것과 그 연장으로서 근린촌락과의 혼인을 파악·검토해 보자. 수치로나 마을 사람의 설명에 의해서도 촌락내혼을

이 높은 것은 뚜렷하다. 현 혼인 건수 250건 중 105건이 촌락내혼으로 비율로 따지면 42%가 된다. 李昌基氏가 매우 높은 비율이라고 한 「적어도 30% 내외 (혹은 그 이상)의 촌락내혼율」에 비교해 보아도 매우 높은 수치이다. 더욱이 구세대에서는 그런 경향이 더욱 명백하다. 실제로 155건 중 84건이 54.2%가 촌락내혼이다.

「옛날에는 60%, 어떤 경우에는 70%정도가『部落內』에서 결혼했다」라고 하는 마을 사람의 설명은 구세대의 54.2%라고 하는 수치로 보면 결코 과장된 통계가 아닌 것 같다. 「70%」를 숫자 그대로 받아들이는 것이 아니고 오히려 그 지방 사람들의 自文化·自社會에 대한 설명 방법이라고 생각하면 수치적인 처리 결과와도 크게 다르지 않다고 이해할 수 있다.

이와 같이 실제의 수치와 마을 사람들의 파악에서 본 바로는 촌락내혼을 제주도 혼인의 중요한 특징으로 규정하고, 근린촌락과의 혼인은 그 연장으로 해석 되어질런지도 모른다. 그러나 나는 그러한 파악 방법에는 반대한다.

앞서 본 바와는 역으로 그 지방 사람들의 설명을 먼저 검토 한 뒤에 한번 더 수치적으로 파악되는 통혼권을 재검토 해 보자. 왜냐하면 현지 조사에서 얻은 수치적인 자료에서는 어떻게 해서든지 현지 사람들의 파악 방법, 즉 사람들이 관념세계에서 그리고 있는 통혼의 지역적 구도를 알고, 그것을 평가 참고하면서 해석을 해 볼 필요가 있기 때문이다. 그렇지 않으면 그 지방문화의 맥락에서 수치만을 가지고 해석되어지는 것은 불가능하다.

마을 사람은 촌락내혼이 과거에는 많았던 것을 인정하는 한편 村落內婚制라고 할 정도의 우선적 규정은 없었다는 점, 또 근린촌락과의 통혼관계도 과거에서 현재에 이르기까지 꽤 있었던 것을 인정하고 있다. 바꿔 말하면 「서로간의 부락 사정, 가정 사정을 알고 있는 사람끼리」결혼하게 되면 촌락내혼은 자연히 많아지겠지만, 똑같은 선상에서 근린 부락들과의 통혼관계도 꽤 있었다고 한다.

「서로간의 부락의 사정을 알고 있는 사람끼리」라고 하는 표현에는 미묘한 의미가 포함되어 있다. 덕수리에서 말하는 뒷하루방, 다른 지역 사람이 말하는 도채비에 대한 신앙까지 포함하고 있다. 요컨대, 특수한 신을 모시고 있는, 아니면 예전에 모셨다는 마을로써 덕수리를 이해 해 주는 사람들이라는 의미가 내포되어 있는 것이다.

여기서 중요한 것은 「서로간의 부락 사정」이라고 하는 것이 미묘하게 민속

## 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討

종교와 관련되는 면이 있는 반면, 확실히 근린 부락들을 염두해 둔 발언이라고 하는 점이다. 결코 부락내 만을 한정하지 않고 근린 부락들을 포함한 범위 내에서 배우자를 선택하면, 결과적으로는 촌락내혼이 많았다고 설명 될 수가 있다. 요약하면 그 지방 사람들은 부락내에 통혼이 많았던 사실을 인정하면서 혼인 관계를 맺는 範圍으로는 근린 부락들까지 포함시켜 파악하고 있으며, 촌락내혼과 근린촌락혼을 일부러 구별해서 분리시키고 있지는 않다. 바꾸어 말하면, 자기 부락과 근린 부락은 통혼의 범위로서는 연속적인 것이다.

그 점은 내가 水山 2里에서 조사한 결과와도 잘 부합된다. 거기에서는 촌락내혼과 두개의 근린촌락혼이 82%를 차지한다. 그 점에 대해서는 그 지역 사람들은 「가능하면 가까운 곳」의 사람을 배우자로 선택한다고 설명하고 있다(津波 1990:78~79). 결코 부락내와 근린촌락을 분리시키고 있지 않는 것이다.

덕수리 사람들이 촌락내혼과 근린촌락혼을 분리시키지 않고 「가능하면 가까운 곳」의 이해 가능한 사람을 배우자로 선택했다고 하는 점은 반드시 확인해서 조사하고 싶다. 더구나 통혼권에 관한 수치를 이해하여 해석하고 싶다.

이미 서술한 바와 같이 구세대에서는 부락내에서 近隣村落, 近接地域, 遠方地域으로 동심원적으로 거리가 멀어짐에 따라 54.2%, 32.3%, 8.4%, 5.2%로 비율이 내려 가고 있다. 근린촌락과 근접지역과의 사이에는 명백하게 수치상의 차이가 있다. 통혼권 전체로 보면 근린촌락의 32.3%는 결코 낮은 수치는 아니다. 부락내 54.2%와 합치면 86.5%라는 큰 수치를 나타낸다. 요컨대, 촌락내혼과 근린촌락혼을 분리시켜 구별하는 것이 아니라 양자를 동시에 파악함으로써 통혼권 안에서도 그 지역의 대부분 사람들에게 있어서도 매우 의미있는 範圍이 이해 가능하게 될 것이다.

그 이해에 입각하지 않고 양쪽을 구별해서 촌락내혼율이 높은 비율만을 강조하면 덕수리와는 반대의 사례, 즉 촌락내혼보다 근린촌락혼의 비율이 높은 사례에서는 해석상 곤란하지 않을까. 예를 들어 城山邑 水山 2里에서는 촌락내혼율은 28%이지만 인접한 두 개의 부락과의 혼인율이 54%에 달해 두 개를 합치면 82%에 이른다(津波 1990:78). 그러한 경우, 어째서 촌락내혼율이 높고 근린촌락과의 혼인은 그 연장으로 해석하지 않으면 안 되는 것일까.

사실 어려운 것은 완전히 촌락내혼율이 낮은 사례이다. 예를 들어 崔在錫氏가 보고한 城山邑 三達 2里의 경우 촌락내혼율은 약 7.8%에 지나지 않는다(崔在錫 1979:142). 이에 반해 李昌基氏는 「한 성씨(광산 김씨)가 집단으로 거주

하고 있어서 同姓同本の 不婚律에 의해 촌락내혼의 가능성이 극히 제한된 특수성이 있었다. 그러므로 삼달 2리의 사례는 제주도의 촌락내혼을 다루는 자료로서 전혀 주목할 바가 아님을 밝혀둔다」라고 설명하고 있다(李昌基 1998:559). 마치 濟州道の 마을로 해서 濟州島의 村이 아닌 것처럼 취급하고 있다. 하지만 이것을 촌락내혼과 근린촌락혼을 분리시키지 않고 동시에 합치면 70.6%가 되어 특별히 예외적이라고는 할 수 없다.

요약하면, 그 지역 사람들의 설명, 수치적인 자료의 어느 쪽이든지 간에 촌락내혼과 근린촌락혼은 구별할 것이 아니라 연속적인 범위로써 파악 할 필요가 있다.「婚姻圈이 어떤 한 부락과 그 近隣部落에 집중되어 있다면 部落內婚과 近隣部落婚까지를 포함하는 部落外婚으로 기계적으로 구별할 필요는 없을 것이다.」라고 하는 崔在錫氏의 지적은 그 의미에서는 매우 정확한 것이라고 평가되어야만 할 것이다. 촌락내혼과 근린촌락혼을 기계적으로 구별해서 분리시킬 것이 아니라, 연속적인 것으로 파악해서 만약 필요하다면 최재석과 같이 그것을 인정하고 나서 그 중에서 촌락내혼을 제시해야 할 것이다.

그렇지 않으면 그 지역 사람들의 설명으로부터 벗어나 수치적 자료에 대한 연구자의 해석만으로 제주 혼인의 특징이 설명 되어지고 말것이다. 그 결과 삼달 2리에 관한 것과 같은 발언이 제기되는 것이다. 삼달 2리에서 촌락내혼율이 낮다고 해서 근린 부락들과의 혼인을 무시하고, 아주 먼 지방과의 통혼이 많다는 것은 결코 아니다. 촌락내혼과 근린촌락혼을 구별하지 않으면, 특히 예외적인 취급을 필요치 않으면 그냥 보통의 제주의 촌락으로써 다루어 진다.

## 6. 맺음말

제주도 통혼권의 특징을 이해 하는데 있어서 李昌基氏는 촌락내혼과 근린촌락혼을 구분해서 촌락내혼의 중요성을 강조한 반면, 나는 역으로 촌락내혼과 근린촌락혼을 구분하지 않고 연속적인 것으로써 동시적으로 파악해야 함을 강조하고 싶다. 이 양자의 차이는 보기에는 아주 미미한 구분일지도 모르지만, 특정한 문화·사회구조를 이해하는 방법에 있어서는 아주 큰 차이가 뒤에 있다고 하지 않을 수 없다. 그 점을 명확히 하면서 결론을 내리고자 한다.

## 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討

李昌基氏가 제주에 있어서 촌락내혼율이 높음을 강조하는 근거는 이미 언급한 바와 같지만, 그것을 다시 명확하게 하기 위해서 다음과 같은 발언도 확인하고자 한다. 「촌락내혼은 육지의 농촌지방에도 존재하지만 고립된 어촌마을이나 도서지방과 같은 특수한 지역에서 비교적 높은 비율을 보이고 있다. 그러나 제주의 마을들은 고립성이 보이지 않는데도 많은 마을에서 촌락내혼의 비율이 높게 나타나서 제주도 혼인양식의 한 특징으로 지적되고 있다」.

이 발언에서 분명한 것 처럼 제주의 촌락내혼율이 높은 것은 육지(한반도)의 특수한 지역을 제외한 일반적인 지역과 비교한 것이다. 간단히 말하면 비교의 대상을 한국 본토에서 찾고 있는 것이다. 요컨대 제주의 촌락내혼율이 높은 것은 어디까지나 한국 본토와 비교한다는 조건하에서 이다. 그러한 조건하에서는 올바른 지적이라고 할 수 있을런지도 모른다.

그러나 문제는 실제로 거기서에서 나타나고 있다. 그렇게 지적했다고 해서 제주 사람들이 어떻게 해서 촌락내혼을 행하고 근린촌락혼을 행했는가 하는 관념적 측면이 전혀 보여지지 않고 있다. 바꾸어 말하면 한국 본토와의 수량적 비교로 시종되어지고 제주 사람들의 관념 세계가 전혀 고려되지 않고 있는 것이다.

여기서 두 개의 문제점이 제기된다. 하나는 emic한<sup>8)</sup> 문화 연구에서의 통계 모델과 구조 모델과의 관계이다. 내가 통계 모델과 구조 모델 두 가지에 기반을 둔 반면, 李昌基氏의 주장은 통계 모델만을 기반으로 삼고 있다. emic한 문화 연구에서의 구조 모델의 중요성을 새삼스럽게 강조할 필요는 없을 것이다.<sup>9)</sup>

또 하나의 문제점은 수치상의 해석에 관해 한국 본토와의 비교에 두고 있는 점이다. 확실히 한국 본토와의 비교의 조건하에서는 촌락내혼율이 높은 점이 눈에 띌 것이다. 그러나 그것은 결국 상대적인 것으로 비교 대상을 구하는 방법에 따라서 또 달리 설명이 가능할 것이다.

예를 들어 오키나와와 같이 촌락내혼이 우선적 혼인 규정으로써 존재한 사례와 비교하면 제주의 촌락내혼율이 아주 높다고는 할 수 없다. 내가 조사한 오키나와의 어떤 마을에서는 제2차 세계대전 전까지만 해도 촌락내혼율이 50%가 넘고 있으며(津波 1997:116), 또한 오키나와의 다른 마을들도 대부분 같은 상황이라고 생각되어 진다. 제주의 30%전후라고 하는 촌락내혼율은 오키나와보다는 오히려 戰前의 일본 본토와의 비율과 거의 비슷한 상황이다(白井 1971:458).

한국 본토와의 수치적 비교만으로 제주의 혼인 특징을 논하는 것은, 예를 들어 오키나와의 혼인 특징을 일본 본토와 수치적인 비교만으로 논하는 것과 같다. 각 나라에 있어서 주변 문화(marginal culture)을 지배 문화(dominant culture)와의 수치적 비교에 의해서만 논하면 결코 주변 문화 그 자체의 연구는 이를 수가 없을 것이다.

위와 같은 점을 명확히 하면서 결론을 논하고자 한다. 내가 이미 얘기 한 바와 같이 南濟州郡 城山邑 水山 2里의 사례에 의거해서 「양반의 통혼권의 범위는 넓고, 일반 서민은 좁다고 하는 계급차에 의한 통혼권의 범위의 차이는 제주도에서 인정될 수가 없다. 한국전역에 공통되는 禁止的婚姻規定으로써의 氏族外婚制와 優先的規定으로써의 階級內婚制에 의하면서 양반 의식을 지닌 자와 지니지 않은 자 어느 쪽이든 近處婚을 행하고 있다」라고 했다(津波 1990:84~85). 근처혼이라는 것은 촌락내혼과 근린촌락혼을 포함하는 개념임을 미리 언급하면서 그것을 덕수리 사례와 비교하여 약간 수정하고자 한다.

먼저, 덕수리에서는 우선적 혼인 규정으로써의 階級內婚制가 인정되지 않는다. 아마 그것은 특수한 민속 종교와 관련해서 이해하지 않으면 안되겠지만, 어쨌든 그것이 인정되지 않는 사례가 있다는 것을 배려하지 않으면 안 될 것이다. 따라서 「한국전역에 공통되는 禁止的婚姻規定으로써의 氏族外婚制와 우선적 규정으로써의 階級內婚制에 의하면서」라고 하지 말고 「한국 전역에 공통되는 禁止的婚姻規定으로써의 氏族外婚制에 의하면서」라고 해야 할 것이다.

다음은 「양반 의식을 지닌 자, 지니지 않은 자 어느 쪽이든 근처혼을 행하고 있다」라고 하는 것은 부정확한 표현으로 「양반 의식을 지닌 자, 지니지 않은 자 어느 쪽이든 대부분 근처혼을 행해 왔으나, 최근에 이르러 원방 지역과의 통혼의 비중이 높아지고 있다」라고 하지 않으면 안 될 것이다.

이 두 가지 점을 정정하고 濟州島를 濟州로 하여 다음과 같이 통혼권의 특징을 파악하려고 한다. 「양반의 통혼권의 범위는 넓고, 일반 서민은 좁다고 하는 계급차에 의한 통혼권의 범위의 차이는 제주에서 인정 할 수가 없다. 한국 전역에 공통되는 禁止的婚姻規定으로써의 氏族外婚制에 의하면서 양반 의식을 지닌 자, 지니지 않은 자 어느 쪽이든 대부분 근처혼을 행해 왔으나, 최근에 이르러 원방 지역과의 통혼의 비중이 높아지고 있다」.

만약 필요하다면 촌락내혼의 그 외 要素에 관해서는 근처혼 안에서의 變異의 폭을 파악하는 것이 가능할 것이다. 매우 높은 비율을 보이는 근처혼 안에서

## 濟州의 通婚圈에 관한 再檢討

촌락내혼의 비율이 덕수리와 같이 높은 경우가 있다면 삼달 2리의 경우처럼 낮은 경우도 있다. 또 수산 2리와 같이 옛날 신분 의식에 의거한 階級內婚制를 인정하는 경우도 있다면 덕수리 경우처럼 인정하지 않는 경우도 있다고 하는 식이 된다.

통혼권 연구의 의의가 「의미있는 사회적 관계의 범위를 찾고자 하는」데 있다(李昌基 1997:559)고 하는 점은 내게 있어서도 전혀 의의가 없는 바이다. 그러나 그렇다고 해서 촌락내혼율이 높은 것만으로 제주의 혼인 특징으로써 일반적으로 강조할 것이 아니라, 통혼권 전체를 살피고 나서 그 중에 있어서의 사회관계의 가장 농밀한 부분을 확인할 필요가 있다. 더욱이 그 변화의 양상도 확인할 필요가 있다.

### 注

- (1) 濟州道는 濟州島를 半島로 하는 지방자치체, 행정구이다. 일본으로 말할 것 같으면 縣에 해당한다. 혼동되는 것은 「道」와 「島」모두 한국어로는 [do:]라고 발음되며, 한글로 표기하면 문맥에 의하지 않고서는 거의 구별이 되지 않는다. 濟州道로서는 한도의 전라남도 쪽에 오히려 가까운 섬까지 포함하고 있는데, 濟州島에서는 도저히 그 전역을 포함시키지는 못한다. 다만 문화적으로는 濟州島를 중심으로 하는 지역과 전라남도에 가까운 섬들에서는 미묘하게 차이가 있음으로, 여기서는 그렇게 엄밀히 하지 않고 약간 애매함을 남기면서 濟州島를 중심으로 한 지역의 의미로 간단히 제주로 간주하고자 한다. 그것이 제주시에 해당 혼돈할 위험성이 없지 않지만 市는 市로 명기 했다. 덧붙여 지명이 한글로 표기된 한국어의 문헌에 관해서는 그 맥락에서 확실히 「濟州道」라고 판단되는 것을 제외하고는 일관적으로 「濟州島」로 번역했다. 내가 쓰고 있는 「濟州」라는 낱어에 가까워서이다.
- (2) 그 목적에 관해서는 각 책의 첫머리의 「발간의 말」을 참조. 또 연도별 간행상황에 대해서는 인용문헌 참조.
- (3) 현지조사는 沖繩國際大學南道文化研究所가 조직한 과학연구비에 의한 해외 공동연구팀의 일원으로서 행했다. 연구소의 관계자에게 감사를 드리는 바이다.
- (4) 그 때 내가 검토한 여러 연구자료는 金興植(1983), 李昌基(1983), 崔在錫(1979), 佐藤(1986)등 이다.
- (5) 덕수리의 약도는 덕수국민학교(1987)에 게재된 것을 기본으로 약간 수정을 했다.
- (6) 덕수리 노인회의 宋英敏회장님, 許基紘총무님 및 리사무소의 金東振이장님께서는 화자의 소개 외에 여러 면으로 도움을 받았다. 여기서 감사를 드립니다. 또한 이 조사에서 어려운 제주사투리의 통역을 해준 東京大學大學院의 姜京希에게도 깊은 감사를 드립니다.
- (7) 마을의 有志들이 〈止祭〉를 결정한 것이 아니고 宋氏門中會議에서 결정했다는 記述

- 도 있다 (덕수국민학교 1987:46). 민속종교의 변화에 관한 흥미 깊은 측면이지만 아쉽지만 이번은 어느 쪽이 옳은가를 판단하지 못한 채 끝났다.
- (8) etic·emic를 여기에서는 吉田(1984)의 방식으로 표기했다.
- (9) 오키나와의 가정에 관해서 구조모델에 비증을 두면서 통계모델까지 다룬 田中の 논문(1985)을 매우 적합한 적용 예로써 제시 하고자 한다.

## 引用文獻

- 崔在錫 1979 『濟州島の 親族組織』(한국어) 一志社 서울.
- 濟州道 1993 『濟州의 民俗Ⅰ 歲時風俗·通過儀禮·傳承演戲』
- 1994 『濟州의 民俗Ⅱ 生産技術·工藝技術』
- 1995 『濟州의 民俗Ⅲ 說話·民謠·俗談』
- 1996 『濟州의 民俗Ⅳ 衣生活·食生活·住生活』
- 1997 『濟州의 民俗Ⅴ 民間信仰·社會構造』(이상 한국어)
- 李昌基 1997 『사회구조편 제2장 가족과 친족』濟州道誌編纂委員會
- 『濟州의 民俗Ⅴ 民間信仰·社會構造』(한국어) 濟州道
- 金興植 1983 『한국의 발견 제주도』(한국어) 뿌리 깊은 나무社 서울.
- 高昌錫 1993 「해설」『濟州大靜縣德修里戶籍中草Ⅰ』(한국어) 耽羅文化研究所
- 小山隆 1954 「通婚圈の意味するもの」小松堅太郎編『高田先生古稀祝賀論文集 社會學の諸問題』有斐閣
- 佐藤信行 1976 『濟州島の「サドン」』南道史學會編『南道-その歴史と文化』國書刊行會
- 白井宏明 1971 「つこうけん通婚圈」大塚民俗學會編『日本民俗事典』弘文堂
- 田中眞砂子 1986 「沖繩の家族」原ひろ子編『家族の文化誌』弘文堂
- 덕수국민학교 1987 『덕수향토지』(한국어) 덕수국민학교
- 덕수리민속보존회 1998 『제7회전통민속재현』(한국어) 덕수리
- 津波高志 1990 『濟州島の通婚圈』杉山晃一·櫻井哲男編『韓國社會の文化人類學』弘文堂
- 吉田集而 1984 「エティックとイーミック」和田祐一·崎山理編『現代の人類學 言語人類學』至文堂